

令和6年度 とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム

活動の足あと3

ようこそ!とりこぼプラットフォームへ

とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム(とりこぼ PF)は、

皆さんが「とりこぼ PF」を「作り」「育てる」というスタンスが大切です。



「継続」と「充実」の肝は関わる皆さんの熱量です。

活動者・ボランティア・専門職が主体的に参加する「場」



参加者は「お客様」ではありません。また参加を強制されることもなく、出入りが自由です。

「つながり」を大切に人・考え・活動に出会える「場」



支援のノウハウ、新しい活動、可能性、アイデアなどたくさんの出会いを感じましょう。

あなたの「思い」は否定されません。他の人の考えに触れ、自由に発言しましょう



あなたの「思い」は大事な 1 つです。皆さんの「思い」が重なり合うことが大切です。

はじめに (令和4年度からの経過)

長岡京市では、令和5年度から『とりこぼさない(重層的)支援体制整備事業』を本格実施するにあたり、令和4年度において庁内での連携体制の整備、多機関協働事業の周知に取り組みました。それと並行する形で、制度・サービスでは対応できない「はざま」といわれる課題に対し、専門職だけでなく、地域住民や市内の活動者等と手を取りあいながら支援について考えていける「土壌」をつくるためのプラットフォームの構築を目指してきました。

「地域に居場所がある」、「必要としてくれる活動・人がいる」、「支援者同士が支援のノウハウを共有する機会がある」。そのようなことが、制度・サービスの「はざま」にある人を支えていく「土壌」になるのではないかと私たちは考えています。そして、その「土壌」を豊かにしていくことを目指して、支援者・活動者が増え、もっと自由に、もっと主体的に「つながる」ことができる場所をつくりたいという思いのもと、令和5年度は『とりこぼさない支援をうみだす交流会』を4回、令和6年度は3回実施することができました。

このプラットフォームが、今後も継続的・主体的に行われ、参画する人の手で育てられることで、「はざま」の課題にある人への支援がよりよいものになることを願い、この1年間のプラットフォーム実施の内容とその経過をここにまとめました。すでに参加した事がある人も、これから参加を考えている人も、本書に目を通していただき、「つながり」を一緒に考えていけるようになればとても嬉しく思います。

とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム
コアメンバー一同

■プラットフォームの目的の再確認と私たちが目指すもの

このプラットフォーム（以下 PF）が実施する交流会は、支援者や活動者同士がつながる場、最初の出会いの一押しをする下支えの場です。それと同時にこの場は、長岡京市が推進する『とりこぼさない(重層的)支援体制』の取り組み状況の理解や、参加者同士の意見交換や支援活動のノウハウの共有を促進することで、包括的支援体制を充実させていくことを目的として運営されています。（「活動の足あと1・2」を参照）

今年度は、3回実施した交流会においていずれも70名を超える参加がありました。また継続して参加いただく方も、新しく参加される方も交じり合い、常に新しい出会いや気づきが準備される場として運営ができました。それは、参加された皆さんの仲間同士の声掛けや、誘い合いによるところが大きいと感じています。

交流会において、新しい参加者が増えたり、「よかったよ」という声をいただいたりするからこそ、私たちは何のためにこのPFを継続していくのかを見失ってはいけないという事をあらためて感じています。特に今年度は開催の度に『とりこぼ PF』および『とりこぼさない(重層的)支援体制』の目的を参加される皆さんと共有していくことを心がけてきました。

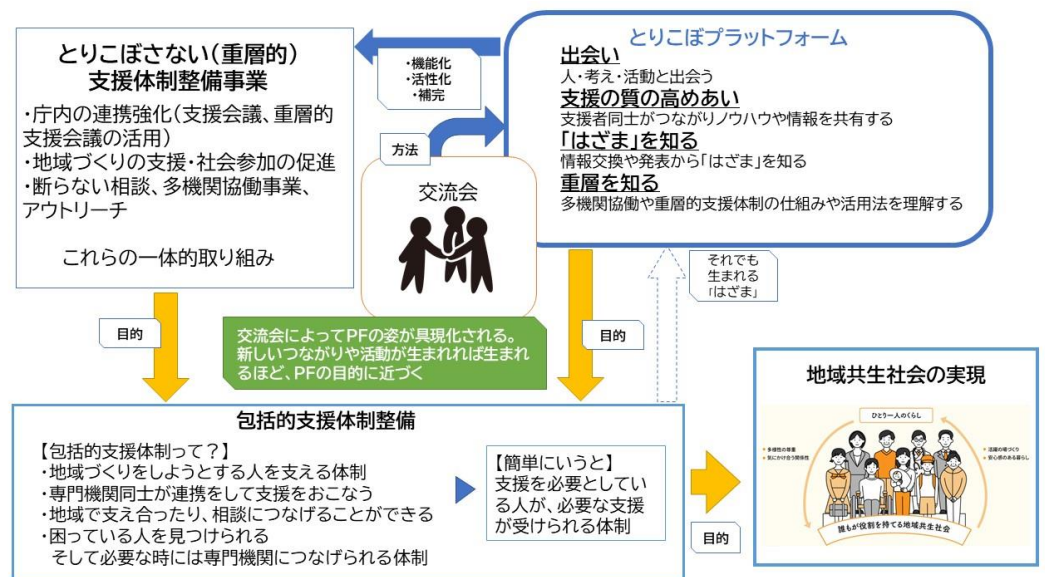
市が実施している『とりこぼさない支援体制整備』も、『とりこぼ PF』も目的は同じで、包括的支援体制を充実するためにあります。包括的支援体制をごく簡単に言うと、支援を必要としている人が、必要な機関や人とつながり、必要な支援を受けることができる

ということを目指すものです。必要な支援は制度やサービスの時もありますが、地域の支え合いのなかで行われたりするものや、地域にある活動や団体が主体的に行うものなど、さまざまなものがあります。それらを掛け合わせて連携し合い、とりこぼされる人が出ないように体制を整えていくことが、『とりこぼさない支援体制整備』と『とりこぼ PF』の共通した目的です。

だから私たちは、この交流会を通して、「出会い」「支援の質の高めあい」「はざまを知る」「とりこぼさない支援体制をどう活用するかを知る」を具現化し、長岡京市の支え合いの土壌を豊にしていき、制度だけでは解決できない課題に直面している人・世帯をとりこぼすことがないように、参加される皆さんと一緒にPFを育てていきたいと考えています。そして、「支える・支えられる」が一方方向ではない、誰もが活躍できる場面がある地域共生社会に向かってともに歩みたいというメッセージを交流会において発信し続けています。

■コアメンバーおよびアドバイザー講師

乙訓もも	NPO 法人乙訓障害者事業協会	藤田 晃久
ステージ	NPO 法人こらぼねっと京都	小松 哲也
あっとホーム	NPO 法人てくてく	柴山 岳博
やよい工房	NPO 法人乙訓やよい福祉会	井上 譲
きずなグループ	(福) 長岡京市社会福祉協議会	西野 寛子
ゆあさ社労士事務所	企業	湯浅 卓磨
フェリーチェ	市民活動	篠田 優美
くらし連携担当	長岡京市地域福祉連携室	林田 文晴



～PFと交流会 2つの違いは?～

本書において、PFは「つながりのある状態」、「いろんな活動に発進できる出発点」といった概念的な状態像を表しています。そして具体的に「出会い」や「つながり」、新しい活動をうみだしていく「場」が交流会であるという使い分けをしています。

アドバイザー講師

(一社) Wellbe Design

篠原 辰二

■令和6年度 『とりこぼプラットフォーム』のあゆみ

R 6 第1回コアメンバー会議	R 6 第2回コアメンバー会議	R 6 第3回コアメンバー会議
日時	日時	日時
令和6年5月9日（木）	令和6年8月2日（金）	令和6年12月19日（木）
トピックス	トピックス	トピックス
▶「はざま」にある人をどうみつけるか ▶PF・重層事業の効果をどう見る ▶PFの効果・成果の共有の必要性について ▶令和6年度の目標設定	▶「当事者の声」の届け方について ▶テーマ別グループワークの「やり方とテーマ」 ▶活動の拡がりの確認、追跡について	▶ミニコア会議11月13日（水）にて新しいコアメンバーへの声かけ ▶希望する講演内容について協議
第5回とりこぼさない支援をうみだす交流会	第6回とりこぼさない支援をうみだす交流会	第7回とりこぼさない支援をうみだす交流会
日時	日時	日時
令和6年6月20日（木） パンピオ3階メインホール	令和6年10月2日（水） パンピオ3階メインホール	令和7年1月28日（火） パンピオ3階メインホール
プログラム	プログラム	プログラム
※活動マッピング ・報告セッション 「まあいいかCafé」/「みーっけ長岡京」 ・つながるワーク（ワールドカフェ再び） ・全員参加のフリータイム	※活動マッピング ・報告セッション「障がいのある人の居場所」チェリッシュクラブ ・目的別グループワーク ・全員参加のフリータイム	※活動マッピング/のんにカフェ ・同志社大学永田教授 特別講演 「私たちは何を指すの？～つながりの先にあるものは～」 ・コアメンバーと参加者による寸劇 ・グループワーク ・全員参加のフリータイム

■令和6年度 第1回～第3回コアメンバー会議

▶「はざま」にある人と、どうつながるか ～地域の力と専門職の協働～

令和5年度の第4回交流会では、重層会議の様子を寸劇で見ていただいたあとにグループワークを実施しました。グループワークでは、重層会議のもっと手前にある住民同士の緩やかなつながり、いわゆるカフェやサロンでの情報共有や、気かけあうような形がくらしの中にたくさんある状態になるといいね。といった支えあいの形の本質をついた意見などがあり、そういった意見交換ができる状態と言うのが「土壌が豊かになっている」ことを示しているのだと改めて気付かされたところです。

寸劇の登場人物のように困りごとに直面している人を相談場所に導いたり、促してくれる友達や知人・場の存在が、自分たちの近くに必要かと問われたときに、地域活動者の多くは、やはり「身近なところにつながりや、多様な資源が増えた方がいい」と答えています。そのことは、住民が相談先にたどり着いたときには、専門職が受け止め、表出する困りごとから付帯的な背景や状況に気づき、包括的に相談にのってほしいという期待の現れでもあり、その力がそれぞれの包括的相談支援事業に求められているのだと私たちコアメンバーは受け止めています。

できる限り「はざま」をうまないためには、専門職が地域活動者以上に包括的支援体制を理解する必要がある、その理解を促進していくことが『とりこぼ PF』や『とりこぼさない(重層的)支援体制』の役割でもあると認識し、その意識を持って令和6年度の取り組みを始めることとしました。

▶令和6年度の目標設定と、『とりこぼ PF』・『とりこぼさない(重層的)支援体制整備事業』の評価

包括的支援体制を構築するうえで、この『とりこぼ PF』をどのように評価していくか、どのような形にしていくかを議論するなかで、交流会実施を通して令和6年度中に達成したい事柄をコアメンバーで協議し、以下の目標を設定しました。

- ① コアメンバーを増やすこと
- ② 交流会のプログラムをパッケージ化すること
- ③ 交流会の中で当事者（家族）の声を届けること
- ④ 交流会に参加したことによる効果を評価すること

・①②について

昨年度のアンケートにより、多くの参加者がこの交流会に継続的に参加することによって『とりこぼさない(重層的)支援体制』の理解度が深まることがわかりました（活動の足あと2参照）。つまり、交流会

の「継続」が包括的支援体制の構築や充実の「鍵」となることを示唆しています。とはいえ、交流会の企画を限られたメンバーで担っていくことにも限界があり、「P F 継続のためにはコアメンバーの増とプログラムのパッケージ化が不可欠である」という考えに至りました。

携わる人が増えることにより、「たくさんの手」で「少しずつの力」でこのP Fを育て、継続可能な事業としていく。また、コアメンバーが増えることで、メンバー同士のつながりも強くなり、主体性が高まる。そして、基本的なプログラムを決めておくことで、誰が企画を担うことになっても交流会の質を担保することができる。その素地を令和6年度のうちに作っていくこととしました。

・③について

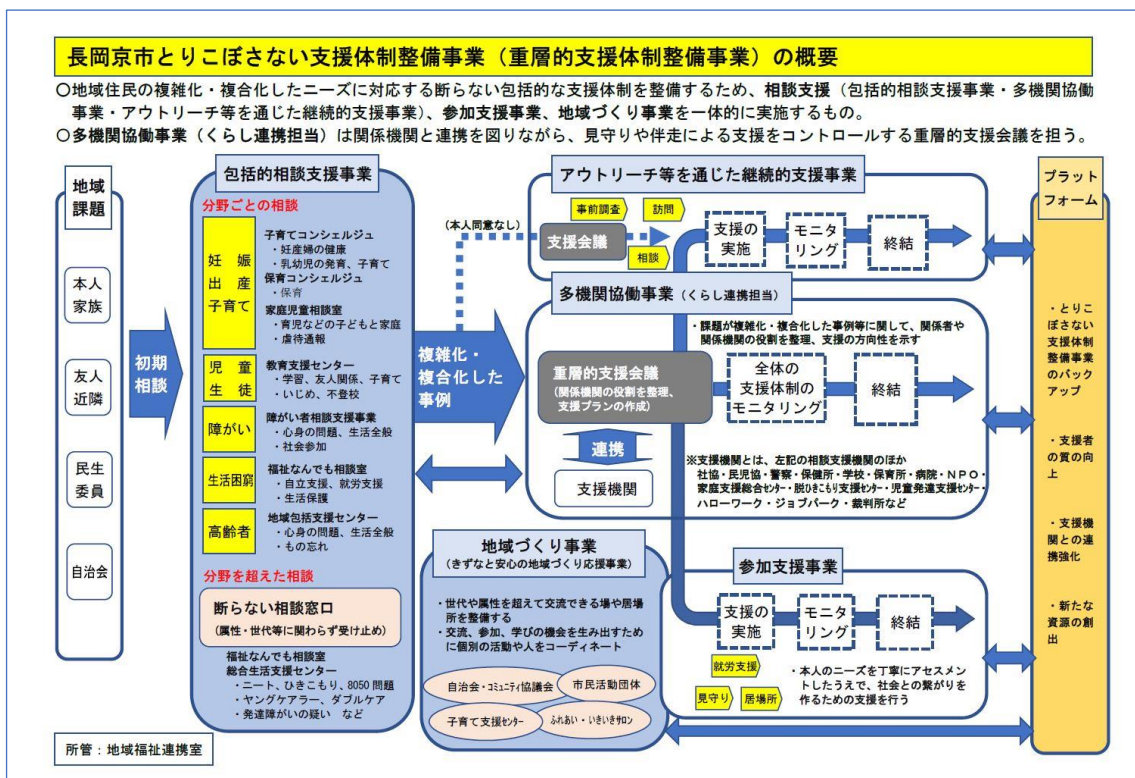
交流会を開催するなかで、専門職・地域活動者・企業などどちらかというと、支援側にまわることが多い人たちとの意見交換や声が集まってきています。しかしながら、地域共生社会は支援する・支援されるを限定せず、誰もが活躍できる社会であり、とりこぼさない支援体制がそれを目指していることは前述の通りです。それならば、交流会の場にも当事者やその家族の声を共有する機会を設けることも大切ではないかというコアメンバーの議論から、令和6年度中の交流会でその機会を作ることを目指しました。

・④について

「出会い」・「つながりの場」として、皆さんに活用していただいている交流会ですが、参加者それぞれにはどのような効果があり、変化が起きているのか。また、初めて参加された方と継続的に参加されている方への効果の違いは何なのか。そのような交流会のアウトカムを把握し整理することがP F 継続の必要性の根拠となると理解し、その調査も令和6年度中に行うこととしました。

▶上記の目標を踏まえて、1年間コアメンバーが意識したこと

長岡京市の『とりこぼP F』は、『とりこぼさない（重層的）支援体制整備事業』をバックアップしながら、支援の質の向上や、支援機関と地域活動との連携強化を促し、新たな資源を創出する場所です。そして、その関係性を具現化する方法が『とりこぼ交流会』であり、その関係性を持続していくことを含めた包括的支援体制の充実には交流会の継続が鍵となることを述べてきました。図に示す体制は、相談の入り口から包括的相談支援事業で受け止め支援が始まるフロー図です。



働事業が支援機関との調整をすることになりますが、忘れてはならないのが、調整先が制度福祉だけでは包括的支援体制の充実には辿り着かないということです。支え合いの土壌を豊かにする「地域づくり事業」や「参加支援事業」と一体的に取り組むことに『とりこぼさない（重層的）支援体制整備事業』の価値があると考えます。そのような視点を持ってあらためてこのフロー図を見てみると、おのずとP Fや交流会

が「出会い」・「つながりの場」だけでなく、「新たな資源の創出の場」の可能性を持った、大切な場として存在することになります。そのようなことを多くの人に実感していただくことを目指しながら、6年度の交流会に臨みました。

■第5回とりこぼさない支援をうみだす交流会（参加：70名）

今年度最初の交流会となる第5回では、『活動の足あと2』の内容を皆で共有したあとに、地域共生社会に通じる活動をされている『まあいいか Café』を「まあいいか labo きょうと」の平井万紀子さんに紹介いただきました。また、地域の居場所や活動がどこに点在しているかをインターネットのMAP上で見る事ができる「み〜つけ！長岡京」の事業紹介を長岡京市社協が行いました。そして、交流会プログラムのパッケージ化の第一弾として年度初めの交流会では「ワールドカフェ」を行うこととして、「出会いの場」が実感できるワールドカフェ方式のグループワークを実施しました。



【年度初めはワールドカフェ！】



【『まあいいか Café』認知症になっても活躍できる社会をつくる】



■第6回とりこぼさない支援をうみだす交流会（参加：71名）

コアメンバーで目標としていた当事者・家族の声を届けるために、第6回交流会では「チェリッシュクラブ」の大川征子さんに活動を紹介をしてもらいました。障がいのあるメンバーさんの笑顔に励まされながら、活動が続けてきた経緯や、苦労を乗り越えてきた前向きな姿勢に参加者からも「励まされた」という声が多数届きました。

プログラムのパッケージ化第2弾の試みとしては、目的別グループワークを行いました。これは、アンケートにも要望があったもので、自分と同じ領域の人とグループワークをしてみたいという参加者の声を実現したものとなりました。しかし、これには賛否両論あり、話したい課題について話すことができたという意見と、いつも話している人と「とりこぼ交流会」で話すのはせっきくの交流会がもったいないという意見がありました。そういった意見を受けコアメンバーでは領域ごとのグループ分けは避け、テーマ別によるグルーピングを次年度以降のプログラムとして定着させることとしました。



【チェリッシュクラブ「障がいのある人の居場所」】



【領域別・目的別グループワーク】

【シノさんのちょっとコラム】

「地域共生社会」「包括的な支援体制の整備」「重層的支援体制整備事業」これらは全て社会福祉法に規定される言葉です。この法律には福祉サービスや法制度に基づかない多様な地域福祉活動を含む「社会福祉を目的とする事業」を行うときの原則として、「利用者の意向を尊重すること」や「地域福祉の推進を行う地域住民等との連携」等が示されており、このことは「はざま」に生きる市民への支援をより良くするためにも重要な視点です。（社会福祉法第5条関係）

専門職による支援と市民による市民目線での支援が織り交ざることこそ「とりこぼさない支援」をより豊かにするものと思います。シンガーソングライターの中島みゆきさんの代表作「糸」では、たての糸と、よこの糸が出会い交わることを「仕合わせ」と表現されています。交流会は長岡京市の市民活動と専門職支援の出会いと協働による支援を生み出し、やがて市民への「幸せ」につながる活動だと思っています。



Wellbe Design 篠原 辰二

コアメンバーのつばやき

劇団とりこぼ第二回公演は地域の課題をその地域にあるグループホームの入居者の力で解決の糸口を見つけたという内容でした。実際、公演の後半は自分の実体験に基づいたもので、以前は近所の人困っていたらハンデがある方もしっかり手助けが出来ていたんです。そして、最高の報酬である「ありがとう」という言葉をもらってとても喜んでいました。

しかし、今はどうでしょう？近所の人と関わる事にどこか遠慮があったり、声をかけにくかったり…。あるいはハンデがある人には「専門知識がないから」と変に「ちゃんと出来ない」と思い込んで一歩踏み出せないのかも。現代のつながりの主流はデジタルで、いつでもどこでも・誰とでも繋がる時代になりましたが、実際に手を貸すのは困っている人が居るその場所なんです。地域で本当に必要なのは「顔が見えて、声が聞こえて、手を延ばせば困っている人に届く」そんなつながりではないでしょうか？

とりこぼ交流会に多くの方に参加して頂いて、そんなつながりの第一歩としての役割を果たしていけないと感じています。

NPO法人てくてく 柴山

■第7回とりこぼさない支援をうみだす交流会（参加：85名 見学：20名）

最多の参加者数となった第7回交流会では参加者同士がしっかり意見交換ができるワークの仕立てを検討し、少人数でのグループワークを行うこととしました。また、つながるばかりで意味があるのかという疑問に対して、つながった先にある姿を皆さんと共有できるように、同志社大学の永田祐教授による特別講演を企画しました。

昨年、好評であったコアメンバーによる寸劇では、重層体制のフロー図の全体をなぞるように、相談を受け止める包括的相談支援事業の側面と、地域のつながりや支え合いの側面の両方を日常の場面に落とし込んでイメージをしてもらう工夫をしました。寸劇にもあったように「支える・支えられる」の両方に誰もが在ることが共有できればうれしく思います。

プログラムの年間パッケージ化の第3弾はごちゃまぜワークとしました。良く知った方と一緒にいるかもしれないし、初めましての方とご一緒するかもしれません。膝を突き合わせて「思い」を語りあう中に、新しい活動の可能性を見出したいと思います。



■全8回の交流会実施から見える、プラットフォームの効果

第7回交流会では、これまでプレ交流会から参加をいただいた方に対して事前アンケートを導入してPFに期待することや交流会参加を通じて得られた効果を聴取することができました。前述にもあるように、とりこぼPFにおける交流会の継続のためには、参加者それぞれには一体どのような効果があり、変化が起きているのかを示す必要があります。特に単発の参加と継続参加を比べたときにどのような違いがあるのかを整理することがPFの継続の必要性の根拠となると考えます。

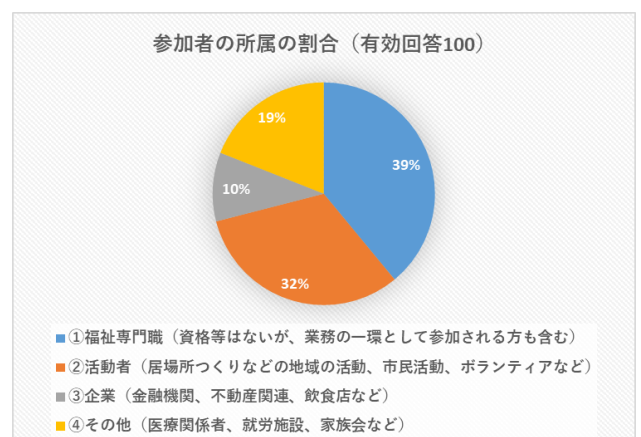
▶『とりこぼPF』のアウトプット（交流会実施の実績）

これまでの交流会に参加された人数とプログラムは以下の通りです。

	R 4	R 5				R 6		
	プレ交流会	第1回交流会	第2回交流会	第3回交流会	第4回交流会	第5回交流会	第6回交流会	第7回交流会
参加者数	50	49	55	54	64	70	71	85
(うち初参加)	—	—	28	11	14	17	12	18
主な企画	とりこぼ体制説明	とりこぼ体制説明	とりこぼ体制説明	活動マッピング	寸劇	活動マッピング	活動マッピング	記念講演
	ワールドカフェ	ワールドカフェ	うまれた活動紹介	うまれた活動紹介	地域共生社会とは	活動紹介	活動紹介	寸劇
			テーマ別GW	ごちゃまぜGW	グループワーク	ワールドカフェ	領域別GW	ごちゃまぜGW

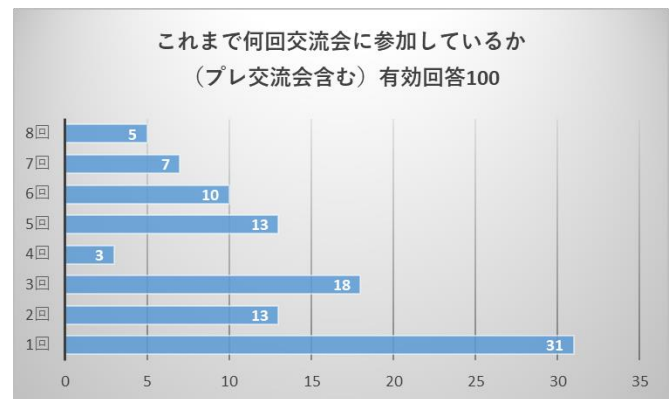
▶『とりこぼ交流会』の特色（参加者の多様さ）

『とりこぼさない支援をうみだす交流会』は令和4年度の3月にプレ交流会を行い、第7回の実施まで全8回を開催しました。当初から福祉の専門職だけでなく多様な活動、所属の方に参加いただいています。あらためてどのような方が参加されているかを見てみると(右図)、福祉専門職だけでなく、活動者、企業、医療関係など多様な方に興味・関心をもっていただき、参加いただいていることがわかります。参加者の多様さは新しい出会いの基礎となるものと考え、今後も多くの方に参加しやすい交流会の企画を継続します。

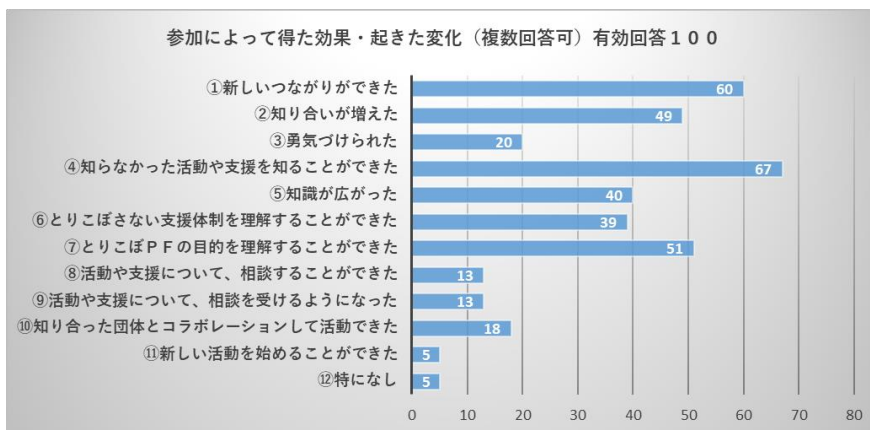


▶継続的に参加される人はどれくらいいるのか

とりこぼ交流会は毎回はじめて参加される方がおられます。次に、どれくらいの方が複数回参加されているかを見ると（右図）、参加が1回の方（31名）と、2回から4回の層（34名）と5回以上の層（35名）がバランスよく分散されている結果となりました。これはこの交流会が、参加を継続することで、新しい出会いがあり、定期的な意見交換や、活動を相談しあえる「場」となり得ることを示唆しています。

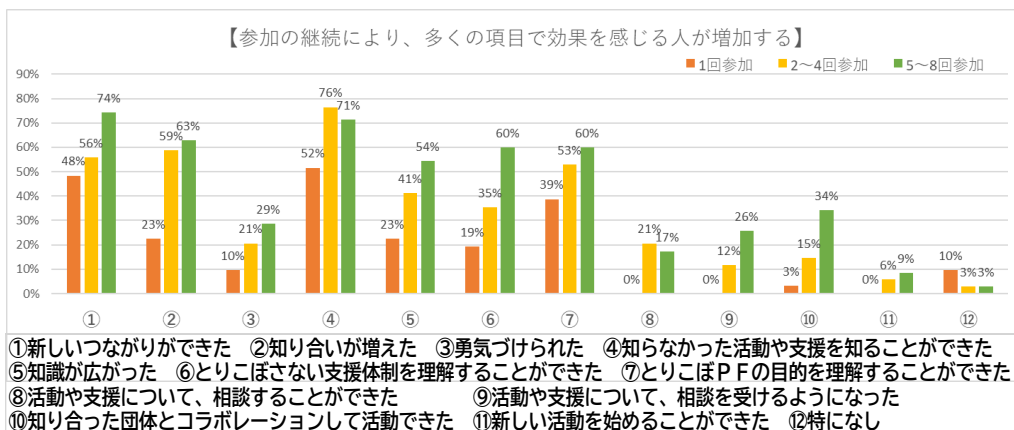


▶『とりこぼPF』のアウトカム（交流会に参加された人が得た効果・起きた変化）



交流会に参加して得た効果の有無やその内容について有効回答100件を見てみると（左図）、「新しいつながりや知り合いが増えた」、「活動を知ることができた」と答えた人は半数を超えています。また『とりこぼPF』や、『とりこぼさない（重層的）支援体制整備事業』の理解が進んだと答えた人も約4割から5割程度あり、参加の効果が「出会い」から「体制の理解」まで幅広いことが分かります。

さらに、この効果を参加回数ごとに分けてみると（下図）、1回参加の人よりも、複数参加、さらに5回以上の参加をされている人の方が、より「出会い」や「体制理解・PFの理解」、そして新しい活動をうみだすことも経験できていることが分かります。これは、とりこぼ交流会の継続があたらしい出会いのみならず、活動のコラボレーションや新しい活動をうみだすことと関連していることを示しています。



【シノさんのワンポイント】

このグラフをみると、5~8回の人でも「新たなつながり」の割合が高いのが面白いですね。

2~4回の方は「知り合いが増えた」の割合が高く、1回の方は「知らなかった活動や支援を知れた」の割合が高くなっています。ということは、ステップがあるのかもしれないですね。

①活動・支援の広さを知る（活動を知る）

➡②認知し合える（人を知る）

➡③つながれる（つながる）

交流会のアウトプットである、「実践」に向けては交流会への参加回数が増えることが大事なのかもしれませんね。交流会を継続する意義がここにあるのだと思います。

Wellbe Design 篠原 辰二



■皆さんと育てていくプラットフォームへ

以上のアンケート回答が示すように、交流会を継続していくことで参加者にも変化が起きてくる場となっています。またそのことが、「はざま」の課題に直面する人への支援につながったり、居場所づくりや活躍できる場面の拡がりにつながること期待して、このPFを皆さんと一緒に育てていきたいと考えています。次年度からは新しいコアメンバー5名を迎えて「たくさんの手」で「少しずつの力」でこのPFおよび交流会を継続していきますので、多くの方の主体的な参画をお待ちしています。

背表紙に参加者からいただいた声（原文ママ、抜粋）を掲載しています。是非ご覧ください➡

活動や支援の際に共同していく上で大事になる姿勢を学ぶことができました。

知り合った団体と交流し、自分の計画を具体的に立案できた。

いい取り組みなので継続して欲しい。

参加された方のご家族から訪問看護の相談があった。家族会の方とも協力していければと思っています。それと、治療が必要な方をつなげることでできる医療機関、特にアウトリーチできる医療機関があれば、重層的相談支援や、地域包括ケアシステムは充実・発展すると思う。

新しい知り合いが増え、またいろんな活動をされてる方がいらっしゃる事を心の支えに…自分のやりたいことを少しずつ確実に作り上げてきました。また、「とりこぼ」のことを広めて参加していただいたりと私なりにできる範囲ですが支援を広げています。

今まで15年程活動していますが制度の隙間や、外れた人や、大勢の中に入れない人がいることが気になっていました。まさしく私が必要だと思っていた内容だと出来るだけ参加しています。子育て、障がい、高齢者と様々な活動がありますがジャンルが異なる活動も知ることが出来て助かります。

地域包括として情報収集やネットワークは必須であり、いろいろな団体や活動と出会えることができた。

活躍の場が広いことを知るとともに、どんな行動を展開していくか、どんなふう展開していくかの参考になっています。

事業立ち上げ時の苦労や工夫を先輩方から聞くことができ、励みになった。

前回、参加して人と人の繋がりが、課題解決につながる姿を見ました。私も何かできることがあるのではないかと次回の参加を決めました。

こんなにも色々な活動や支援がある事にもビックリしましたし、色々な方とお話できて行動や考え方など勉強にもなりました。

介護保険にとらわれない高齢者支援はないかと考えるきっかけになりました。

これから計画している新しい試みについて、興味ある人と繋がれた。

知り合いになった団体さまの活動を紹介したり、逆に私たちの活動に参加していただくなど、新たな交流のきっかけとなりました。地域のつながりが大切であることも実感でき、大変感謝しております。

市内で歩いているいろいろな人に声をかけてもらえるようになった。

地域で、行政、福祉、教育、企業など、多くの方が、誰かの生きづらさを和らげるために連携して何かしようと意欲をもっておられるということを知れて、勇気づけられました。なかなか継続的に参加することが難しいですが、こうやって、参加したことを履歴に残して声をかけてくださっていることもありがたいです。

地域の新しい活動をつくれました。

重層的支援の意味がなんとなくわかり、福祉と教育、発展をどう関連づけて社会づくりをすればいいのかをイメージするきっかけになった。



令和6年度 とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム

活動の足あと3

作成

とりこぼさない支援を考えるプラットフォームコアメンバー

長岡京市地域福祉連携室